

人工知能の發展

愛甲次郎

人工知能の發展をめぐる議論は最近益々白熱の度を加へつつあり。グーグル社のカーツワイル氏は、人工知能の發展につき、その自律的改良と指數關數的進歩の二點の特色を指摘、その結果技術は暴發し人類の制御不能となる所謂技術的特異點を迎ふるは二千四十五年と豫言せり。勿論これに對する反論も喧しく、コンピューターは所詮曖昧を處理するを得ずとなす論者あり、またロボットは意識を有すること能はずと説く識者あり。されど太陽系外惑星を求むるケプラー觀測衛星における同時大量觀測の例に徴すれば、量子コンピュータ實現の暁には曖昧の處理もあながち夢とは思はれず、コンピューターのアルゴリズムの類推の腦科學の發展に著しく貢獻せる歴史的事實に鑑むればロボットの今後の研究却つて意識自體の構造を解明すべきこと荒唐無稽の説となすべからず。この問題に結論を得るは未だ暫くの時日を要す。

いづれロボット大量に人間の職を奪ふべしとの憂巷うれたに多く聞けども、事實は遙かに深刻にして、人類の政治經濟システムは根本的變革を迫られ、第二奴隸制社會とも稱すべきの到來今や避け難しと見ゆ。ロボットの改良進みて感情、意思共に備ふるに及び人間とほぼ異ならざるに至らばこれを奴隸と呼ぶに何の憚るところやあらん。

かく世の變動激しからんも人間集團間の抗争の治まること期し難し。世の集團この争に勝ち残るには負担のみ多き人間の數を減らし、効率高きロボットの増加を圖るべし。集團間抗争にて主役を演ずべき軍隊も兵士の過半は expendable なるロボットと化すれば戦争の様相も一新すべし。人間と相異なる所なきロボットに選舉權を永久に拒否すべきか。苦痛を覺ゆるに至りしロボットの反抗を如何に抑へ得べきか。

宇宙開發の將來に關しても過酷なる宇宙環境に生身の人間を曝さんよりは有能なるロボットを派遣すること遙かに賢明なり。今後宇宙に擴大すべき人間活動はほぼ全面的にロボットにより擔はるるべし。

ロボットの人間化と並び看過すべからざるは人間の機械化なり。サイボーグなる語の生まれしは古きことなれど、今やそは急速に現實味を帯びぬ。補聴器、人工眼球、人工皮膚、ペースメーカー、義足のみならず、これまで思ひも及ばざる分野にて人體の部品を人工物にて代替する計畫、研究進みつつあり。一例を擧ぐればカリフォルニアのさる大學にては腦の海馬にマイクロチップ(ナノチップと稱すべきか)を埋込みコンピューターと接續することにより、記憶力を數十倍數百倍と増大せしむる試みなされる由なり。電動アクチュエーター、人工筋肉等を備ふるエクソスケルトンは軍用に實用化せらるることは時間の問題なり。人間の意識をコンピューターにアップロードしてほぼ永遠の命を得る可能性米國にて論ぜらると聞く。機械による人間能力の強化はそれを利用し得る富裕層と然らざる層との格差を著しく擴大せしむるものなり。いづれ生物學的人類の時代終焉を告げ、機械としての人類の世となるべしとの論も妄説とは言ひ難し。

(平成三十年九月二十六日受附)